須賀川市教育研修センター・教育支援センターだより
「 み ち 」
第152号
令和６年 11 月 15 日 発行

【今月のことば】
もともと地上に道はない
歩く人が多くなれば、それが道になるのだ（「故郷」 魯迅）
※　研修センター内に掲示してあります。

第３回須賀川市立学校長会議から

１１月６日（水）、須賀川市役所において第３回須賀川市立学校長会議が開催されました。永瀬教育長からは就任のあいさつがあり、「すべては子どものために」を判断基準にしていくという話がありました。

また、協議の中で、現在各学校で取り組んでいる「学習指導要領に基づく主体的・対話的で深い学び（協同的な学び）による授業づくりと学校づくり」について、「理念を継続すること」「各学校の主体的な研修となるよう実施方法は統一しないこと」「次年度のアドバイザー派遣については検討中」という話がありました。

今後この取り組みはますます学校の主体性に委ねられていくものと思います。もっと言えば、「校長が自校の授業をどうしたいか」、ビジョンと哲学をしっかり持ち授業づくりによる学校づくりを進めていかなければなりません。

学校において子どもと教師が一番多くの時間を過ごしているのが授業であり、子どもの学びと育ちを促す最も大事なものであることを忘れずにいたいものです。

※１５２号担当者より　上述で「学習指導要領に基づく主体的・対話的で深い学び（協同的な学び）による授業づくりと学校づくり」という表現を用いました。ご存じのとおり、「学習指導要領に基づく主体的・対話的で深い学びによる授業」と「協同的な学びによる授業」は同じです。最近は「探究と協同による授業」という言い方をする教育学者もでてきました。本市で「協同的な学びによる授業」という表現を使って取り組みを進めていくうちに、共有の課題やジャンプの課題などの在り方をめぐって混乱した事実があります。他地区から来た先生方は目新しく見える授業スタイルに当然戸惑いましたし、中には「須賀川でしか通用しない。他地区ではどこもやっていない」とか「これは須賀川方式だ」とか話される先生も出てきました。本市の取り組みは、学習指導要領で求められている授業、また令和の日本型教育で求められている授業を実践しようとするものであり、先生方に間違ったとらえをしてほしくないとの考えから、教育委員会では今後、できるだけ「学習指導要領に基づく主体的・対話的で深い学びによる授業」という言葉を用いてまいります。方針が変わったわけではありませんのでお含みおきください。

授業探訪　教師の挑戦・学校の挑戦

秋の大きな行事が小、中学校とも一段落し、１０月の後半から各校で授業の質を高める校内研修が盛んにおこなわれています。その取り組みの背中を押したいと考え、研修センターでは、毎日できるだけ多くの学校にお邪魔しています。多くの皆さんに取り組みの一端をぜひ知ってもらいたいことから、今号では、ジャンプアップ研修でのＳ先生の挑戦の様子と、白江小学校のアドバイザー訪問による校内研修の様子を以下に紹介します。自分及び自校の取り組みの参考としていただければ幸いです。

１　教師の挑戦　－Ｓさんのジャンプアップ研修－

▲　読み描く国語の授業

この研修は、本来、若く経験の浅い教師が対象で、子どもの学びについて考えながら授業をデザインする力の向上を目的としていますが、３年生を担任しているＳさんは経験も豊富で力量も十分であるにもかかわらず、自らこの研修を希望しました。子どもの前に立つ以上、常に教師として学び続け、よい授業をしていかなければならないということを話すＳさんに頭の下がる思いがしています。

１学期から相当数のＳさんの授業を参観してきましたが、２学期は特に国語の授業（文学・説明文）の改善に努め、授業の質を高めたいとのことから、「ちいちゃんのかげおくり」「姿を変える大豆」の２単元について、週に１～２回程度、授業を見せていただき、放課後はリフレクションの時間を持ちました。めざす授業のテーマは“読み描く”－。「ちいちゃんのかげおくり」の授業は紙面の都合上掲載できませんが、「姿を変える大豆」の授業では、事前に次のようなことをＳさんと確認して授業に臨んでもらいました。

- **説明文は何かを説明することを目的として書かれた文章なので、知らなかったことを知ることができることが最大の魅力。授業では「へえー、そうなのか」と驚いたり、面白く感じたり、感心したりしながら、子どもの知的好奇心が説明されている中身を丁寧に心が満たされるように「読み描く」まで音読させていく。それをしないうちに、要約とか段落の組み立て方など「文章の書かれ方」を取り出して考えさせることはしない。**
- **説明文が持つ魅力が学ぶ子どもに最大限に引き出されるようにするために、協同的に学ばせる授業を心がけ、一人残らずの子どもの学びが保障され、子どもが夢中になり没頭して学ぶことができるようにする。**

Ｓさんの教室では国語の授業が始まると、すぐにテキストの音読が始まります。一瞬にして学びにあふれた心地よい雰囲気に教室が包まれます。Ｓさんの子どもに語り掛ける声は、１学期に比べると格段に数も減り、小さく穏やかになりました。これは、子どもが夢中になって学んでいるときに教えることより子どもの声を聞き子どもがテキストをどう音読し、どう読み描いているのかを見て聞いて感じ取ることに意識が向いているからにほかなりません。繰り返し何度も読むごとに子どもはテキストの世界に入り込み、没頭していきます。わからないことがあるとぼそぼそと小声で友だちと話をし、そしてまたテキストへと目を移します。その様子が参観していてとても心地い

いのです。
「『ちいちゃんのかげおくり』『姿を変える大豆』の授業を通して、子どもが楽しそうに学んでいるのがわかる。今までで落ち着きがなかったＥさんが、席に座り以前に比べると随分全然目立たなくなった。驚くことに単元末のテストもよく、びっくりした。私の授業観が大きく変わった。継続していきたいです。」と、Ｓさんは言っています。
Ｓさんの挑戦は続きます。１１月からＳさんは算数「まるい形をしらべよう」の授業をひらき、ジャンプアップ研修に取り組んでいます。

【10 月 18 日実施の授業】デザインと時間
○「姿を変える大豆」第３～７段落
1　声に出して読む（１１分）
　・　ペア読み～ひとり読み
2　「気付き」に線を引く（１０分）
3　グループ交流（７分）
4　全体交流（８分）
5　声に出して読む（２分）
6　感想記入（５分）

２　学校の挑戦　－白江小学校の授業づくりの取り組み－

１１月７日（木）、白江小学校の校内研修実施日。この日は学校教育アドバイザーの訪問日になっており、朝から永島孝嗣アドバイザーが来校。授業を通して多くのことを先生方が学べた一日となりました。
白江小学校では定期的に「現職だより」を発行しており、いただいた現職だよりには「一人残らず４５分学び続ける授業の推進」と題し、本校がこの取り組み（学び合い）を進めるにあたって「複雑化する社会を生き抜くためには生涯を通じて他者とともに学び続ける力が必要。学び合いはそのためのもの。」「形にこだわらずに、いいこと思いついた」を毎日継続して実践していこう」という、職員で共有したいことが書かれてありました。
３校時、４校時は全教室の授業を参観。午後の中心授業は６年社会科の授業。単元は『江戸幕府の政治の安定』で、鎖国について理解を深めることがねらいでした。
午前も午後もすべての教室で一人残らずの教員が学習指導要領に基づく主体的・対話的で深い学びによる授業に挑戦していました。日常的に挑戦を続けていることがわかり、とても頼もしく感じました。
放課後のリフレクション後は永島アドバイザーの話。今求められている授業は２１世紀型の探究と協同の学びによる授業であり、一斉指導、板書などに代表されるこれまで行われてきた２０世紀型授業と比較しながら話がありました。また、机間巡視等による個別指導が子どもの学びにどんな影響を及ぼすかであるとか課題設定の重要性、プロジェクト型の学習のススメについての話もあり、刺激的な時間でありました。
白江小学校は授業を変えたことで、教師が変わり、学校が変わり、子どもが育つ過程を歩んでいます。実は市内の多くの学校も似たような歩みを進めています。今後がますます楽しみです。

▲　学び合う白江の子（左・中）　子どもの学びから教師も学び合う（右）

「コトバ主義教育」から抜け出ること　その４　《 コラム No.15》

前々回のエピソードを続けます。12 月、東京都内の小学校、低学年の女の子が算数の引き算のテストを全部足し算に変えて(－ → ＋)回答しました。「どうして足し算にしたの?」と尋ねる先生に、女の子は「引き算をすると寒い感じがするから」と答えました。もちろん算数とは無関係…なことではあるのですが、そうとも言い切れないかもしれません。
小学校算数にはいくつかの柱がある、と佐藤学さんは言います。一つは「量的感覚」、そして単位数と単位数当たりの量、十進法=位取り、平面・立体の感覚等。「量的感覚」は割合や変わり方にも発展していきます。感覚として、足し算は増えていく感覚(暖かいか寒いかといえば暖かい!)がありますし、引き算は減る、掛け算はドンドンと増えていく小気味良い感覚と均等で気持ちよい感覚、割り算はちょっと構えるか後に引く感覚、、、きれいに割れる時はちょっと小気味いいけど、余りがあるとややこしい。(私だけの感覚のようです。先日市内の特支の先生と話していたら、割り算が好きで余りのある割り算も好きな子がいるというお話を伺いました。)。量的感覚の出発点はこんなところから始まるのかもしれません。むしろここに、足し算に変えた女の子の算数の学びの足場があるのかもしれません。
でもまぁこんな彼女ですから、通信簿はオール２ぐらいでした。ところが翌年、いきなりオール５になりました。驚いたのはお母さん、担任の先生に尋ねます。「何かの間違いですよね」「いいえ、その通りです」と担任。心配した(というのも変ですが)お母さん、本人に尋ねます。「○○ちゃん、どうしたの?」・・・すると○○ちゃんが答えます。
さあ、○○ちゃん、何と答えたでしょうか。次回に回したい気もしますが、まずは考えてからこの先をお読みください。(ちなみにこの話、演出家の竹内敏晴さんに小学校教師が話した実話ですので、悪しからず。)
答えはこうです。
「朝学校に行くでしょ。すると先生が教室に入ってきてみんなの前に立つの。先生が教卓の上の花をチラッと見て、しおれてきているので『誰かが水を入れてくれないかな』って顔をするの。だから○○ちゃん、お水を入れてあげるの。そうするとオール5!」
もちろんお花のことだけではないでしょう。でも彼女には教師が何を求めているかわかり、そしてそれに答え(応え)れば評価されることをはっきり意識しているのです。去年までは自分の感覚を優先していた彼女が教師の求めを優先したら「オール 5!」
最近、教師の準備した課題やワークシートに子どもたちが取り組んで、ノートにも黒板の通りに写して書くけれども、本当に自分たちの学びになっているのだろうか、と思う授業を見ることがあります。校内の研究会で子どもたちの姿を語り合うことも、すべてはこの点にあるのだと思います。
さて、○○ちゃん。2 年くらい経って、通信簿が 2 から 5 の間でばらつくようになりました。「ハハー」と思ったお母さん、また「どうしたの?」と尋ねました。さあ、どんな答えが返ってきたでしょう。ではまた次回。